洗面器

田辺康智

昭和三十年代、自分が子供の頃に住んでいた家は二階に八畳一間、下は六畳二間、板一枚の壁は冬になると隙間風に加えて雪も入り込むようなかなりのオンボロ家だった。

最近当時近くに住んでいた人から話しを聞く機会があったが、その社宅が建てられる初期の段階で敷地に廃材が山と積まれ、その山の中から適当な板を選んでは家を建てるという作業が始まったので、近所の人達は驚き、一体どんな人がここに越してくるのだろうと噂になっていたらしい。しかも建てかけ中の風の強いある日、強風に煽られ崩れてしまい再び最初から建て直しをしていたのだそうだ。

酷寒の朝に顔を洗おうとするとタオルは凍り、コップに立てかけていた歯ブラシを取ろうとすると、凍り付いてコップごと持ち上がった。子供の頃はそれが普通のことだと思っていたので、立派な家に住んでいるとは思わなかったものの、自分の家がそれほど酷いとは感じてはいなかった。居間の中央に設置された石炭ストーブには銅製の寸胴鍋のような形の「湯沸かし」が取り付けられており、冬場はいつでもお湯が使えるようになっていた。

そこから柄杓で汲んだお湯を洗面器に入れ、凍ったタオルを縦に持ちお湯の中に立てかけると、凍てついたタオルが次第に溶けて腰砕けのようになるのを見るのが面白かった。

父が親会社に戻ることになり、十四年近く住んだその社宅に別れを告げ、新たに建てたマイホームに移り住むことになった。引っ越した家は二階に自分用の部屋があり、何から何まで新しく、中でも風呂にシャワーがあるのが画期的だった。前の家にも風呂はあったが、頭を洗う際には洗面器を持ち上げて頭にお湯をかけていた。風呂場には水道（冷水）のみでお湯は出なかった。

そういう訳で新居の住み心地はすこぶる良かった訳だが、唯一自分には受け入れ難いものがあった。

それは洗面台だった。白い陶器製の洗面台には左右にお湯と水の蛇口が付き、洗面台に水やお湯を貯めるため銀色の鎖が付いた黒く丸いゴム栓が付属していた。親からこれからはここで顔を洗い、歯を磨いたり、うがいをするのだと言われ、顔を洗うことに異論は無かったが、うがいをしたり歯を磨いて口から吐き出した洗面台で顔を洗うということにかなり抵抗を感じた。自分のものでも嫌なのに、自分以外の人間が吐き出した洗面台で顔を洗うことはあり得ないことだと思えた。引っ越して最初の頃は、しぶしぶ洗面台に一度水を溜めて、ゆすいで排水してからまた改めてお湯を貯めて使うようにしていたが、何度やっても馴染むことが出来ず、兄からの助言も有り、風呂で使っていたプラスチック製の洗面器を洗面台の中に置いて使うようにすると、今までのもやもやしていた気持ちが消えたのだった。以来現在に到るまで半世紀以上の時間が経った訳だが、今も同じ方法で顔を洗っている。

二十一世紀になっても、世の中の新しい住居を見ても、洗面台が二つ並んで洗顔用、歯磨き用と分かれて設置している家というのは見たことが無い。ということは大多数の人達は顔を洗う洗面台と歯磨きやうがいをする洗面台が共通でも構わないと考えているのだろう。

これだけ新型コロナのウィルスが世の中に蔓延していても、このことを疑問に感じて問題視する人がいないのだから理解に苦しむ。

大学を卒業して就職する段になり、家を離れて会社が用意してくれた三ＬＤＫのマンションで共同の生活が始まった。当然ながら、そこでも同じように自分専用の風呂用のプラスチックの桶を洗面台に置いて洗顔に使っていた訳だが、そのことを快く思っていなかった同居人がいたということを最近、と言っても十年以上も前だが、知って驚いた。

又聞きではあるが、その内容は、くだんの住人は洗面器の使用について快く思わず、私の不在時にその洗面器を雑巾バケツの代わりに使っていたのだという話だった。その時に同居中のもう一名の関西出身の人物は、彼の行為を笑いながら静観して止めようとはしなかったそうだ。

とは言え、その人物は普段は部屋の掃除をすることなど全く無く、自分の部屋は散らかって汚れ放題の状態で、仕事が休みだったある日、立ち寄った上司の一人がそれを見て、あまりの汚さに社内でどうにかすべきだと問題視し、ついには社長の知るところとなって、彼の直属の上司が状況検分の為にその部屋を訪れたところ、想像以上の汚さに言葉を失ったほどだったので、その彼がこまめに雑巾がけをすることはあり得ず、やったとしてもせいぜい一度か二度のことだったと思われる。

面白い事に、こちらは彼のお陰で実際にはさほどきれい好きではないのに、社内では割ときちんとしてきれい好きの人間だと見られるようになっていたのでおかしかった。自分の部屋の押し入れ越しに隣から臭いが侵入してくるのを防ぐ為に押し入れの内側の壁にキムコを三個ガムテープで貼り付けていたのをその上司が見咎め、社内で一度ならず吹聴して笑いの種にしていたことも、実際に現場を見ていない人達の想像力を刺激した部分はあったかも知れない。その時たまたま自分の部屋の押し入れを開けていたから上司がキムコに気が付いたのか、それとも自分がわざわざ押し入れを開けて貼り付けたキムコを見せて惨状を訴えたのか、今となってはもう記憶が無いのだが、実際問題として上司がわざわざ実況検分の対象外である隣の部屋に来て押し入れを開けて調べるとは思えないのだが。

くだんの人間は、それから何十年も経ってから、自分のその行為を恥じて悪いことをしたと後悔していたとも聞いた。彼も自分もかなり前にその会社を退職していて転職や独立をしたので、会う機会はほとんど無くなってしまっている。彼から直接その話を聞いた人物が私に言うには、お前は虐められていたのだよと断定的に言うので、そんなことは無いだろうと反論した。当時のことで彼が絡んでいることで憶えていることは、共同で使っていた冷蔵庫に自分用に保管していた清涼飲水を勝手に飲まれたことが何度かあった程度だと話すと、それこそが虐めなのだよと言うので、そんなものは虐めのうちに入らないだろうと反論をすると、お前は間違えている、それは立派な虐めなのだと断言するので、それ以上は反論する気にならなかった。さらに彼が言うには、もしお前が自分は虐められているという自覚が無く、日常の表情や態度に表れていなかったとすれば、やった相手にしてみればそれも腹立たしいことになるはずだと言うので、失笑するしかなかった。

そんな昔の話をしたものだから在職中のことをあれこれ思い出してみて、当時は微塵も思わなかったことだが、自分がくだんの人間を差し置いた形で海外事務所に駐在員として派遣されたことがひょっとして彼の行為に陰を落としていたのかもしれないと考えたりもした。と言うのも、当時社内で社長に一番近いとされていた彼と同じ大学を卒業している役員に、海外事務所への赴任について相談をしたという話を同期の人間か

ら小耳に挟んでいたことも思い出したからだ。どういう話がされたのか、内容については全く不明も、駐在員になれないだろうかいう相談だったのかも知れない。しかしながら、もしも仮にそのことがこちらへの反感の一因となっていたとすれば、それはお門違いだろうと彼に伝えてみたい気もする。というのも、当時新人の社員に課せられていた事務所に早出して皆の机の雑巾がけをせず、雑巾がけの後に待っている前日の夜に本社宛に送られて来た海外事務所からの通信文を翻訳する作業も滅多にやらなかった。さらに毎月のように出張する社長や役員、社員達が持参する物品のカートン詰めの梱包作業、梱包明細の作成、それらの荷物を積み込んでの空港への送迎（土日が多かった）なども彼はほとんどやっていなかったので、その手の雑用を引き受けていた人間と、そうではない人間では一年、二年単位で見れば社内での評価におのずと差が出てしまうのは致し方ないだろうと思うからだ。

雑巾がけで思い出したが、最初はゴム手袋をして机を拭いていたが、それを見た上司が「今年の新人はゴム手袋をしている！」と驚いていた。雑巾がけをする時にゴム手袋をするのは普通のことだと思うのだが、そのこともきれい好きな人間と誤解されることに一役買っていたのかも知れない。

いずれにしても、海外での勤務は自分の人生の中で得がたい経験となり、それが財産にもなってその後の仕事でプラスに作用したことは疑いようが無い。

仕事をしなくなった今の自分は限りなく食うや食わずに近い状態ではあるものの、毎日のほほんと過ごしていられる今の状況と、当時の状況がそれなりに結びついていることを考えると、人間何が幸いとなるか分からないものだとあらためて思う。

（完）